

下つ巻 仁徳天皇

五、雁の卵の祥瑞

一、日女島 ひめ 淀川の河口にあった島。今の大阪市西淀川区姫島町あたりの地をいう。安閑紀に大伴大連に勅して「牛を難波の大隅島と姫島松原とに放て。冀くは名を後に垂れむ」といったとある。姫島が宮廷とゆかりある地であったのを知りうる。ここで宴をやろうと出かけたのである。

二、鴈 かり 多くの鳥の名がそうであるように、これも鳴き声に由来する名らしい。中世以降は「雁」「雁」を音讀しガンと呼ぶようになり、カリは雅語として残った。雁は北方の大陸から秋に渡来し、春になってまた帰る候鳥。中国などでも同じで「仲秋の月……鴻鴈来り玄鳥（つばめ）帰る」（「礼記」月令）とある。万葉には「家離り いへさか 旅にしあれば 秋風の 寒き夕に 雁鳴 かり 渡る」（万七・一一六一）（家を離れて旅にあると、秋風の寒い夕べ、雁が鳴き渡って行く。）ほか、鴈 かり が音を含め鴈 ね を詠んだ歌は五十首を越える。しかしここは、雁 かり が卵 こ を生んだことが問題となっている。

三、歌をもちて……問ひたまひき。 神武の段に太久米命、イスケヨリヒメを見て「歌以ちて」天皇に次のように白したとある。「倭の、高佐士野を、七行く、媛女ども、誰をし枕 ま かむ」（九九頁）。それに対し天皇、やはり「歌以ちて」次のように答えたとある。「かつがつも、いや先立てる、兄 え をし枕 ま かむ」（九九頁）と。これはこの場面と似ている。当時では、日常語と歌のことばとがさほど距っておらず、したがってほとんど即興的に歌を日常の会話で交すことができたらしい。万葉の歌なども、即興歌がかなり多いと目測される。

四、たまきはる 内の朝臣 うち あそ タマキハルは内にかかる枕語だが、かかりかたや語義は未詳。「魂極まる」の意かも知れぬ。万葉には「たまきはる 宇智 うち の大野に 馬並めて 朝踏 あさふ ますらむ その草深野」（万一・四）（たまきはる宇野の大野に馬を並べて、朝の野をお踏みになつていであろう、その深草野よ。）とあり、名高い。ここのウチは近侍の延臣の意であり、「内の朝臣 あそ 」といういいかたも、そのことを裏づけている。アソは吾兄 あせ で男を親しんで呼ぶ語。万葉には「仏造 ほとけつく 真朱足らずは 水溜 た まる 池田の朝臣 あそ が 鼻の上を握れ」（万一六・三八四

一）（造仏の塗装用の赤土が足りなかったら、水溜まる池田の朝臣の赤鼻の上を握れ）。ソホは朱の絵の具。池田の朝臣が赤鼻であったのでかくあざけたもの。

五、そらみつ倭の國に 雁卵生と聞くや ソラミツはヤマトにかかる枕詞だが、そのかかりかたは不明。神武紀に、ニギハヤヒノミコトが天の磐船に乗って空から見おろし天降ったので「虚空見日本國」というとあるのは、もとより起源説話である。雁は秋には北から飛来するが、産卵も北方大陸でおこない、日本でそれを見かけるのは稀であつたらしい。

六、高光る日の御子云々 この一首の意味は次のようになる。「（高光る）日の御子よ、お尋ねなさはごもつとも、ようこそお尋ね下さった、私こそはこの世の長寿者、されど（そらみつ）倭の国で、雁が卵を生むとはまだ耳にしたこともありませぬ」と。

七、汝が御子や 終に知らむと 雁は卵生らし 「つひに知らむ」は末長くいつまでも国を治めるだろうの意。「つひに」をのち遂にの意に受け取ることも出来、そうなれば位にく前の歌になるが、物語の配列順からしてやはり末長くと解する方がいい。何れにせよ、雁が卵を生むのを瑞祥と見てのことである。そしてそれを「聖帝」仁徳の世のこととしている点がこの段の要である。

八、本岐歌の片歌 ホキはホクの名詞形。神功皇后の歌に「少名御神の 神寿き 寿き狂ほし、云々」と既出。そしてホキ歌は祝い歌の意だが、それは宮廷歌曲の名でもある。この歌を建内宿禰が琴を弾いて歌ったとあるのは、次の段に琴の話が出て来る前触れとなっている。

九、免寸 「播磨風土記」讃容郡中川里の条に「河内国免寸村」とあり、神名帳には和泉国大鳥郡（もと河内国）に等乃伎神社がある。「姓氏録」にも、和泉国神別に殿来連とある。今の大阪府高石市富木の地にあたる。

十、高木ありき 云々 所謂 巨木伝説（多くの類話がある）の「記」における一伝承。

十一、その船を號けて枯野と謂ひき 応神紀五年の条に「伊豆国に科せて、船を造らしむ。長さ十丈。船既に成りぬ。試に海に浮く。便ち軽く泛びて疾く行くこと馳るが如し。故、其の船を名けて枯野と曰ふ」とある。「枯は軽の意なること、此記も書紀も同じ」と「記伝」は云う。カラノは伊豆国田方郡狩野郷（和名抄）、同郡軽野神社（神名帳）とあるカルノにかかわる名に違いない。万葉集にも、

○「防人の堀江漕ぎ出る伊豆手舟楫取る間なく戀は繁けむ」（万二〇・四三三六）（防人が難波の堀江を漕ぎ出て行く伊豆手舟の櫓を漕ぐ間の休みないように、いつも故郷への恋は止む時がないことであろう）。

○「堀江漕ぐ伊豆手の船の楫つくめ音しば立ちぬ水脈早みかも」（万二〇・四四六〇）（堀江を漕ぐ伊豆手舟の櫓を強く握って、櫓の音がしばしば立っている。水脈の流れが早いのであろうか）。

とあり、伊豆の国ぶりの舟はひろく知られていた。

十二、大御水^{おほみもひ} 飲水のことをモヒという。オホミモヒは天皇の飲み料をいう。「寒泉^{しみづ}」を汲んだとあるが、モヒは冷たいのをよしとしたからで、さらに古代では水の冷たいのをサムシといった。

了